

(一) 次の文章は、劇作家の木下順二が一九五五年に書いた「日本人の思想」の一節である（一部省略した箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

ドラマトウルギーということばがあつて、ふつう「劇作術」と訳されているが、ドラマトウルギーの古典とされる教科書に、十九世紀にドイツのフライターク(注1)が書いたドラマトウルギー論がある。その中でフライタークは、ギリシャ時代から当時までの代表的な戯曲を分析して、そこから戯曲の法則ともいべきものを 1 的に整理しているが、この法則は、その後さまざまな問題がそこにつけ加えられたにもかかわらず、やはりドラマというものの基本法則であると考えられる。

フライタークによれば、ドラマというものは、二つの力の対立によってつくられる。そのAとBとの二つの力の対立は、次のような順序で戯曲として展開する。まず最初の導入部で、対立するAとBとの事情が説明されるが、五幕形式の古典戯曲なら、これが第一幕に当る。次にその対立が錯綜さくそうしつつ、Aの力が上昇線をたどる第二幕。第三幕は両者が決定的な対決をするいわゆる危機の場面であり、そこでBにやぶれたAは次の第四幕で下降線をたどり、第五幕はいわゆるカタストロフィ、終結の場面である。そこには、単にAに対してBが勝ったということではない、闘争の結果として生れた一つの「調和」がねがわくはありたいのだが、戯曲というものは、このようにして、線2で表わすならピラミツド型を描くような構造を持つとフライタークはいう。

日本の近代劇がその歩みを始めて以来、戯曲作法の教則本として支配的な影響をそこに与えたのは、イブセンの戯曲とともにこのフライタークであつた。そしてその後の、諸外国からのさまざまな理論の輸入にもかかわらず、フライタークはやはり基本的なドラマの法則を示してくれるものとして、今もわれわれの前にある。だがフライタークが説いている対立ということ、その対立の線がピラミツド型を描くということ、そのことの意味がわが国で果して正しく理解されてきたかどうか、その点になると甚だ疑問だといわなければならない。

ドラマトウルギーが「劇作術」という日本語に訳されたことは、わが国におけるドラマトウルギー理解の不十分さを期せずして説明しているといえる。わが国ではドラマトウルギーが、単に戯曲をつくる「術」として理解された傾きが多分にある。集めて来た素材をどのように劇的に処理するかというその技術として、フライタークはしばしば利用されたのである。技術の適用がうまく行けば、それはなるほど面白い戯曲にはなるだろう。いわゆる「劇的」な場面がそこに展開されることにはなるだろう。だがドラマトウルギーがそのように理解される限り、そこにあるものはつくりものの「劇的」であり、それは本当の「ドラマティック」を意味しない。AとBとがなげえ対立するかという根源的な理由が、そこでは閑却されてしまっているからである。

4

だがそこで得た問題を、むしろ劇作家は制約もなく叫びあげるのではない。それを戯曲というフォームに入れる。厳密なフォームの中に圧縮されることによって、あるいはフォームに媒介されることによって、とりとまりのない現実とはじめて現実とは異質の、現実と連続し非連続であるという関係においてただしく現実を内包する生きた統一的世界に再生する。ドラマトウルギーとは、現実の中に入り組んだ対立を、戯曲という形式を通して、はっきりとした対立にまで整理する方法、発展の契機をその中に含む対立としての認識にまでそれを高める方法であるといえる。その時はじめてその戯曲は、力とフヘン性5を持った作品として自立する。ドラマトウルギーは、単なる「術」としてではなくこのような一つの思想としてとらえられなければならない。「6」(注2)というスタニスラフスキーのことは、ドラマトウルギーをこのように思想としてとらえた時にもみ理解される。そしてドラマトウルギーをこのようなものとしてとらえることは、実はすでにアリストテレスの『詩学』の中に出されている考え方なのであつた。

そこで問題が二つ出てくる。一つは、日本近代戯曲史の中で、ドラマトウルギーをこのようなものとしてとらえた作家はきわめて少数しかなかったが、それがなにゆえそうだったのかということ。この問題については別な場所を考えていたので、今はひとことだけいいそえておくと、その少数の作家たちは、過去の日本の少数の「思想家」たちに対比されていたのかも知れない。伝統的な劇作術としてはあの歌舞伎の、順々に事件を並べて行くといわば絵巻物的な方法しかなかった場所で、ドラマトウルギーという「外来の思想」を自分のものにするということは、今日想像される以上に困難な仕事であつただろう。

だが外来の思想をとり入れるということは、それを特定の「思想家」が理解するということではない。それを日本の

思想として新しく日本に生れさせるということである。その思想が日本という場に生きない限り、それはまだ思想と呼ばれるわけには行かないのだ。——というわかり切った問題と、日本の近代劇もまたつき当らなければならなかったところとに、第一のそれよりも重要な第二の問題がある。

この点については、演劇というものが、一般的な思想の問題の問題点をきわめて具体的にあらわしているといえる。演劇は観客がなければ成り立たない。作者は当然観客を予想し、観客の反応を予測しつつ書くが、そのことは、作者が自分自身の感覚なり考えなりで決める範囲の観客を対象として書くということではない。作者がいかに現実をリアルにとらえてき、それを思想にまで高めて打ち出しても、それはその限りでは作者の観念の中の思想に過ぎない。作品が一人一人の観客の中にはいつて行つた時、作者の観念の中の思想は、そこで生きてはたらくべきかどうかがためされることになる。作品を書くことよつて自分を変えて行こうとする作者の努力がまた現実をも変えるはたらくべきかどうかがどうか——そのことを通してのみ作者自身も本当に変わることができるとは——が、ためされることになる。それが実際にためされるのは、劇場から家に帰つた観客たちの生活の中においてだが、意識されなままにでもためされ得る契機がそこに存在する時、その夜の舞台ははじめてドラマティックなものに盛り上るだろう。日本の近代劇は、作者が観念的だとか観客が特定層に限られているとかいう批判をしばしば受けてきたが、そのような批判は、それがなにゆえそうなのかという理由を明らかにし得ない限り無意味なものであった。そしてその理由は、作者のみの中にあつたのではない。また観客のみの中にあつたのではない。二つが互いに結びつくことよつてはじめて共に生きられる場をつくり出す契機が、日本の中になかつたといつていい過ぎなら、それがきわめて弱かつたということなのである。

そういう契機の不在証明を、過去の日本の中にくわしくさぐる仕事は、これもほかに場所があるだろう。今は現在の日本の中に、そういう契機の存在証明をさがす仕事が必要である。そしてその存在証明は、まだおぼろげにはあつても、たしかに見いだされるとはぼくは思う。

(注) 1 「フライターク」：十九世紀のドイツの劇作家、小説家（一八一六―九五）。

2 「スタニスラフスキー」：ロシア革命の前後に活躍したロシア・ソ連の俳優、演出家（一八六三―一九三八）。

問一 空欄 1 には、「個々の具体的事実から一般的な命題ないし法則を導き出すこと」を意味する漢字二字の語が入る。楷書で記述解答欄に記せ。

問二 傍線部2の「ピラミッド型」と対照的な戯曲の構造を端的に表した箇所がある。その箇所を含む一文を問題文中から抜き出し、冒頭の四字を記述解答欄に記せ。

問三 傍線部3「甚だ」の漢字の読みをひらがなで、5「フヘン」の漢字を楷書で、それぞれ記述解答欄に記せ。

問四 空欄 4 は一つの段落で、次の四つの文から構成されている。イ、二の順番を正しく並べ替えたとき、三番目に来る文はどれか。次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ しかもそれは、何かの対立を客観的に眺めるといふことではない。

ロ 対立を含む現実を、いいかえれば現実の中にある対立をとらえることが、戯曲を書くという仕事の根本である。

ハ 現実の中で、作者が自己の対立者と対決するといふことである。

ニ 対立の根源的な理由は、もちろんそこから戯曲の素材を得る現実そのものの中にある。

問五 空欄 6 に入る文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 戯曲は歴史の弁証法を最もよく反映する芸術の一種である
- ロ 戯曲は現実の種々相を最もよく活写する芸術の一種である
- ハ 戯曲は社会の不条理を最もよく告発する芸術の一種である
- ニ 戯曲は人間の処世術を最もよく寓意する芸術の一種である
- ホ 戯曲は未来の可能性を最もよく示唆する芸術の一種である

問六 傍線部7「演劇というものが、一般的な思想の問題の問題点をきわめて具体的にあらわしているといえる」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 観客がなければ成り立たない演劇が、思想にも読者の存在が不可欠で、日本では優れた思想を受け入れる読者がごく限られたものでしかないことを具体的にあらわしているから。

ロ 日本の演劇は、作者が自分の感覚なり考えなりの狭い範囲の中でしか書こうとせず、そのことが現実をリアルに捉えなければ思想にまで高められないことを具体的にあらわしているから。

ハ 古典芸能の伝統から脱皮できないでいる日本の近代劇が、日本の思想においても封建的なものの見方や考え方を残存させて、新しい観念を発信できないでいることを具体的にあらわしているから。

ニ 演劇は本来、観客の日常生活に働きかけ改変することではじめて劇的効果をあげるので、思想もまた著者の観念が読者と現実を変えるものでなければならぬことを具体的にあらわしているから。

ホ 演劇は作者のみの問題としても、観客のみの問題としても理解できないもので、いつの時代でも読者が筆者の問題点を共有できなかった日本の思想のありかたを具体的にあらわしているから。

問七

問題文の趣旨に合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ドラマトウルギーということばは、単なる「術」としてではなく、現実世界の対立と葛藤を解消するための根源的な思想として理解されなければならない。

ロ AとBの対立の諸相をいかに描いても、それだけではつくりものの「劇的」であり、本当の「ドラマティック」は対立の根源的な理由を問うことによってしか獲得されない。

ハ 戯曲を書く者には、常に現実を客観視することではなく、現実の規範や道徳を批判的に観察し、それに対立して疑いと反抗の叫びをあげる側に立つことが求められている。

ニ 戯曲の素材は常に現実であり、現実の中に入り組んだ対立や葛藤を描くことによって最も効果を発揮するものであるから、日常とかけ離れた空想的な舞台を設定することは難しい。

ホ これまでの日本の演劇において、ドラママトウルギーの本質を理解した優れた戯曲を書いたのは少数の作家にすぎないが、彼らは思想家としても卓越した評価を得ていた。

問八

次にあげるのは、近代・現代の代表的な戯曲・戯曲集である。この中から木下順二の作品を一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 「女の一生」

ロ 「近代能楽集」

ハ 「出家とその弟子」

ニ 「修禪寺物語」

ホ 「父帰る」

ヘ 「夕鶴」

(二) 次の文章は、猪木武徳『自由の思想史―市場とデモクラシーは擁護できるか』(二〇一六年)の一節である(一部省略し文字を改めた箇所がある)。これを読んで、あとの問いに答えよ。

人間の知識が不完全である以上、人は未来に向けてつねに不確実な状況での思考と行動を迫られる。いかに多くの時間とエネルギーを費やしても、結局どこかの時点で「賭け」なければならぬ。この「賭ける」という行為は、われわれに期待や不安をもたらすが、同時に悪徳への道に通じることもある。法や慣習が「賭け」を、どこまで、どのようなルールで許容するのか、その枠組みを整えながら経済は豊かな発展をとげてきた。

賭けは度を越さなければ楽しいとは言うものの、その「度」がどの辺りなのか、境界線ははっきりしない。そもそも、ある賭け事は違法であるが、別の賭け事は合法とされ、「投機」と呼ばれ白昼堂々と行われているのはなぜか。競輪や競馬は合法なのに、賭け麻雀はなぜ犯罪になりうるのか。国が賭博事業を管理・経営しているではないか。パチンコでは現金引換えが禁じられているのに、競輪・競馬では換金が行われている。金融商品取引、商品先物取引、保険契約はなぜ認められるのか。これらの取引や契約も「度」を過ぎれば、犯罪を生み出すことがあるではないか等々、さまざまな疑問が生まれる。

イ ¹この素朴な疑問に対して、「違法性阻却」という概念が答えを与えてくれるという。このセイコウな法律用語は、「通常は法律上違法とされる行為でも、その違法性を否定する余地があること」を指すという。例えば民法で、他人の不法行為から自己または第三者の権利を守る行為である「正当防衛」や「緊急避難」は不法行為の成立を否定する例だ。刑法でも、法令に基づいて行われる行為や正当業務行為は、刑法規定では違法性が推定されても、「違法性はない」とされる(つまり阻却できる)ことがあるという。この「違法性阻却」によって、先に挙げた金融商品、商品先物などの取引には「3」という言葉を使わずに「投機」と呼ぶのだ。この「違法性阻却」の法理によって、仮に違法性があつたとしても、一部の賭けや「投機」は違法とはみなされないのだ。

ロ ²では投機と投資はどう異なるのか。投機は、「将来売るために買う」行為であつて、購入価格と売却価格との差益(キャピタル・ゲイン)を目的としている。そこには所有権の移転があるだけで、国民所得の増大に貢献するような「正」の要素はない。

この投機という言葉はもともと思索的な意味を持つて生まれたとされる。辞書によると、仏教の言葉で、「指導者の機(人格的力量)と学人のそれが投合すること」、「仏法の玄奥(げんこう)にして肝要なる道理に相かなうこと」を指す。英語の speculation も、推測、推量だけではなく、思索や熟考を意味して用いられる場合がある。投機は思惑で買ったたり売ったりするわけだから、「思索」とみなせないことはない。しかし日常感覚では、思索には、ロダンの「考える人」のような重さと真剣さがあるとの思い込みがある。一方、投機には、「売り逃げ」などのすばしこさを想像させるところがある。しかし投機はもともとは取引のリスクを小さくすることを目的に行われた。暴落しているときに取って買う、高騰しているときに取って売る、こうした行為が長い目で見れば平均収益にとつてプラスになるという判断からだ。それが、次第にただ短期的な価格変動から収益を得る行動が意味の中心を占めるようになった。

他方、投資は、経済学では不確実な将来の収益を期待しつつ現時点で確実な額の費用を投下する行為を意味する。ただ、この「投資」という言葉は、日常の言葉とは意味がずれている。株式や債券を買うとき、「投資した」と言うことがあるが、証券の売買は生産の拡大を可能にする資本形成ではない。経済学では、あくまでも実物資本や在庫の増加、つまり資本形成がなされた場合だけを「a」とみなし、証券の売買のような投機とは区別する。

われわれの生活は様々な不確実性やリスクのもとで営まれているから、利益を求めて不確実な将来に「賭ける」という行為は人間の生活から切り離せない。経済成長の重要なエンジンとなる投資は、将来の売れ行きを予想しながら、新技術を体化した新しい機械設備を購入することによってなされる。

ハ ⁴投資の概念は、物的資本だけでなく、人的な資本にも当てはまる。高等教育を受ける、新天地を求めて移住をする、「投資」行動と見なされてもよいのだが、国民経済計算の統計(いわゆるGDP統計)ではこれらの支出は経済学的には「消費支出に参入される。企業の資産としても「人的資本」は重要な資産だが、企業会計では「貸貸対照表」の資産項目には入らない。その企業がどのような人材を抱えているか、どれほど優秀な技術者集団がいるのかは、企業資産の重要な要素であるにもかかわらず、資産として計上されないのだ。

いずれにせよ、投資にも「賭ける」という要素が存在し、賭けるからこそ、賭けに勝った者への報酬が存在する。「賭ける」自由があつてはじめて、経済が活性化するので。この点から「投資」と「投機」を比較すると、自由な「**b**」は生産拡大の道を開くということ、それに対して、株式や債券の売買のような「**c**」は、資本の用途の効率化を促す機能（利潤率の高いところに資金が流れる）はあるものの、直接生産のための資本設備の増強を保証するものではない。その自由を認めても、「**d**」による所得はあくまで「不労所得」なのである。

将来が不確実である以上、「賭けること」が経済生活と人間の生そのものに深くかかわっていることは改めて指摘するまでもない。「賭ける自由」が社会的に受容されるのかどうかは、現実にはその自由がもたらす社会的帰結を功利主義的な観点から判断するのが妥当なようだ。

この投資の問題を透徹した知性で、現実感覚を持って論じたのはJ・M・ケインズであった。彼は「一般理論」第二章で投資の問題に取り組んでいる。興味深いのは、そして何より重要なのは、ケインズが「長期の期待」と「短期の期待」を分けていることだ。設備投資が将来収益に結び付くのかどうかを予想するのが「長期の期待」であるのに対して、一定の資本設備の下でどれだけ生産するかを決めるのが「短期の期待」であるとする。前者は、企業家の長期的な経済環境についての確信の度合いが影響する。しかしその確信たるや、実は根拠の極めて薄いものにすぎない。一年先のことを高い精度で予測できる経営者はいない。そこで、投資の決定要因として持ち出すのが「アニマル・スピリット」なのだ。生得的な活動の衝動であり、合理的な計算もするが、しばしば気まぐれや感情や運に頼る、まさに「悪魔のように細心に、しかし天使のように大胆な」行動なのだ。

現代のように所有と経済が分離した経済社会では、証券市場が巨大な市場を形成している。この証券市場の肥大化によって、短期的な思惑で証券の売買を行うもの（投機家！）が増加し、金融システム、ひいては経済システム全体の安定性を損なう原因になるとケインズは指摘している。

見れば、経済全体にプラスの働きがあることは確かだ。しかし、証券市場の「投機」は、政治の世界でのデモクラシーが抱え込む問題と似た弱点を持っている。デモクラシーの下で選ばれる政治家と政策が人々の考える価値と必ずしも一致するとは限らない。ケインズが言うように、株価は必ずしも実質的な企業の将来収益性を反映しないこと、すなわち「多数の無知な個人の群集心理の結果となる世間的評価」が必ずしも実質的な投資価値と一致しないという問題を抱えているからだ。

この「世評」と「実質」の乖離を説明する例が、有名な「美人投票論」だ。

この投票指針は「実質」ではなく「世評」なのである。

問九 次の一文が入る最も適切な箇所を空欄 **イ** ~ **ホ** のから一つ選び、解答欄にマークせよ。

投資という「賭け」は、新たな付加価値を生み出すという意味で生産への貢献は大きい。

問十 傍線部1「違法性阻却」について問題文から理解できる意味内容の例として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 医師が正当な医療行為のために患者の身体にメスを入れた。

ロ 著作権侵害であるとは知らずに海賊版CDを製造販売した。

ハ ボクシングの試合でルールに従って競技をし相手を殴った。

ニ 見知らぬ男に刃物で襲われた際にやむを得ず相手を殴った。

ホ 自動車にひかれそうになって飛び込んだ家の垣根を壊した。

問十一 傍線部2「セイコウ」と同じ漢字を用いるものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ その人は、事業にセイコウして歴史に名を残した。
- ロ 彼の言葉は、あまりにたどたどしく、セイコウだ。
- ハ 彼は、友人からセイコウ不良をたしなめられた。
- ニ その時代には、さまざまな文学理論や思想がセイコウした。
- ホ その着物にはセイコウな刺繍がほどこされている。

問十二 空欄 3 に入るのに最も適切な漢字二字の語を、空欄 3 より前の問題文中に見出し、楷書で記述解

答欄に記せ。

問十三 空欄 a には、「投機」または「投資」のいずれかの語が入る。それらの組み合わせとして最

も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ a 投資 b 投資 c 投機 d 投機 e 投機
- ロ a 投資 b 投資 c 投機 d 投機 e 投資
- ハ a 投資 b 投機 c 投資 d 投機 e 投機
- ニ a 投機 b 投資 c 投機 d 投資 e 投機
- ホ a 投資 b 投機 c 投資 d 投機 e 投資

問十四 空欄 4 に入る文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 資本形成のために、高付加価値商品の価格の上昇に賭ける
- ロ 評価の高い教育施設を買収して、教育市場の拡大に賭ける
- ハ 将来の不確実な収益性に対処するため、資本形成に賭ける
- ニ いま確定したコストを投下して、将来収益の増加に賭ける
- ホ 将来の不確実性を軽減するために、きまぐれや運に賭ける

問十五 傍線部5「証券市場の「投機」は、政治の世界でのデモクラシーが抱え込む問題と似た弱点を持っている」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 証券市場の「投機」は、金融システムの安定性を損なう可能性を持っているので、不正な政治資金によって腐敗する可能性があるという点でデモクラシーが抱える問題と似ている。
- ロ 証券市場の「投機」は、長期的な収益性を評価して行われるものではないので、短期的な効果が期待される政策が追求されやすいという点でデモクラシーが抱える問題と似ている。
- ハ 証券市場の「投機」は、企業の実際の価値が売買されるものではないので、必ずしも有能な政治家が選挙で選ばれるわけではないという点でデモクラシーが抱える問題と似ている。
- ニ 証券市場の「投機」は、収益率の高い事業を効率的に探す機能を持っているので、利益誘導の政治家に票を集めさせることがあるという点でデモクラシーが抱える問題と似ている。
- ホ 証券市場の「投機」は、資本設備の増強を保証するものではないので、選挙で選ばれた政策の実現可能性を保証するものではないという点でデモクラシーが抱える問題と似ている。

には「美人投票論」について説明した一文が入る。その文を記述解答用紙の空欄を補うかたちで完成させよ。その際、次の条件にしたがうこと。

・全体を「株式市場の人々は、自分が投票する」という形式にまとめること（太字の部分はあらかじめ解答用紙に記してある）。

・文の途中に「美人」、「他人」、「投票するのではなく」の語句を用いること（用いる順番や回数は自由とする）。

・記入欄には三十五字以上四十字以内で記入し、読点も字数に含めること。

(三) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

甲〔次の文章は、作者が備後国の鞆とま（現在の広島県福山市鞆町）を經由して、安芸国の宮島へ赴いた前後の記事である。なお、省略した部分、原文を改めた箇所がある。〕

備後の国、鞆といふところに至りぬ。何となくにぎははしき宿と見ゆるに、大可島とて離れたる小島あり。遊女の、世を遁のがれて、庵並べて住まひたるところなり。思ひ捨てて籠りぬたるもありがたくおぼえて、「つとめには何事かする、いかなるたよりにか発心せし」など申せば、ある尼申すやう、「我はこの島の遊女の長者なり。あまた傾城を置きて、面々の顔ばせを営み、道行き人を頼みて、留まるを喜び、漕ぎ行くを嘆く。また、知らざる人に向かひても千秋万歳を契り、花のもと露の情けに酔ひを勧めなどして、五十路に余りはべりしほどに、宿縁やもよほしけむ、有為の眠り一度覚めて、二度故郷へ帰らず、この島に行きて、朝な朝な花を摘みにこの山に登るわざをして、三世の仏に手向けたてまつる」など言ふも、うらやまし。これに一、二日留まりて、また漕ぎ出でしかば、遊女ども名残惜しみて、「いつ程にか都へ漕ぎ帰るべき」など言へば、「いさや。これや限りの」などおぼえて、

いさやそのいくよあかしのとまりともかねてはえこそおもひさだめぬ

かの島に着きぬ。漫漫たる波の上に、鳥居はるかにそは立ち、百八十間の回廊さながら浦の上に立ちたれば、おびたたく船どももこの廊に着けたり。大法会あるべきとて、内侍（注1）といふ者、面々になどすめり。九月十二日、試楽とて、回廊めぐる海の上に舞台を立てて、御前の廊より登る。内侍八人、みな色々の小袖に、白き湯巻きを着たり。うちかませての楽どもなり。唐の玄宗の楊貴妃が奏しける霓裳羽衣（注2）の舞の姿とかや聞くと、なつかし。会の日は、左右の舞、青く赤き錦の装束、菩薩の姿に異ならず。天冠をしてかんざしを挿せる、これや楊妃の姿ならむと見えたる。暮れゆくままに楽の声まさり、秋風楽ことさらに耳に立ちておぼえはべりき。暮るるほどに果てしかば、多く集ひたりし人、みな家々に帰りぬ。御前ももの寂しくなりぬ。

これにはいく程の逗留もなく、上りはべりし船の内に、よしある女あり。「我は備後の国、和知といふところの者にてはべる。宿願によりて、これへ参りて候ひつる。住まひも御覽ぜよかし」など誘へども、「土佐の足摺の岬と申すところがゆかしくてはべる時に、それへ参るなり。帰さに尋ね申さむ」と契りぬ。

かの岬には堂一つあり。本尊は観音におはします。隔てもなく、また坊主もなし。ただ修行者、行きかかる人のみ集まりて、上もなく、下もなし。いかなるやうぞと言へば、「昔、一人の僧ありき。このところに行ひてゐたりき。小法師一人使ひき。かの小法師、慈悲を先とすることざしありけるに、いづくよりといふ事もなきに、小法師一人来て、齋（注3）、非時（注4）を食ふ。小法師、必ず我が分を分けて食はす。坊主いさめて言はく、『一度、二度にあらす。さのみかく、すべからず』と言ふ。また明日の刻限に来たり。『心ざしはかく思へども、坊主叱りたまふ。これより後はなおはしそ。今ばかりぞよ』とて、また分けて食はす。今の小法師言はく、『この程の情け、忘れがたし。さらば、我が住みかへ、いざたまへ、見に』と言ふ。小法師、語らはれて行く。坊主、あやしくて、忍びて見送るに、岬に至りぬ。一葉の舟に棹さして、南を指して行く。坊主泣く泣く、『我捨てて、いづくへ行くぞ』と言ふ。小法師、『補陀落世界（注3）へまかりぬ』と答ふ。見れば、二人の菩薩になりて、船の艦舳（注5）に立ちたり。心憂く悲しくて、泣く泣く足摺りをしたりけるより、足摺の岬と言ふなり。岩に足跡留まるといへども、坊主むなしく帰りぬ。それより、『隔つる心あるによりてこそ、かかる愛き事あれ』とて、かやうに住まひたり』と言ふ。

とかくするほどに、霜月の末になりにけり。京への船の便宜あるも、何となくうれしくて、行く程に、波風荒く、雪、

撥しげくて、船も行きやらず。肝のみつぶすもあぢきなくて、備後の国、和知といふところを尋ぬるに、ここに留まりたる岸より程近く聞けば、下りぬ。船の内なりし女房、書き付けて賜びたりしところを尋ぬるに、程近く尋ね会ひたり。何となくうれしくて、二、三日経るほどに、主がありさまを見れば、日ごとに男、女を四、五人具し持て来て、打ちさいなむありさま目も当てられず。こはいかにと思ふ程に、鷹狩とかやとて、鳥ども多く殺し集む。狩とて、獸持て来るめり。おほかた、**F**なる節、鎌倉にある親しき者として、広沢の与三入道といふ者、熊野参りのついでに下るとて、家の中うち騒ぎ、村郡の営みなり。絹障子^(注4)を張りて、絵を描きたがりし時に、何を思ひ分く事もなく、「絵の具だにあらば、描きなまし」と申したりしかば、「鞆といふ所にあり」とて、取りに走らかす。よに悔しけれども、力なし。持て来たれば描きぬ。喜びて、「今はこれに落ち留まりたまへ」など言ふも、をかしく聞く程に、この入道とかや来たり。おほかた、何とがなともてなすに、障子の絵を見て、「田舎にあるべしもおほえぬ筆なり。いかなる人の描きたるぞ」と言ふに、「これにおはしますなり」と言へば、「定めて歌など詠みたまふらん。修行の習ひ、さこそあれ、見参に入らん」など言ふもむつかしくて、熊野参りと聞けば、「のどかに、この度の下向に」など言ひ紛らかして発ちぬ。

(「とはすがたり」による)

(注) 1 「内侍」…巖島神社の巫女。

2 「齋、非時」…僧の食事。「齋」は戒に従った正午以前の、「非時」は上記の時間外のことを称する。

3 「補陀落世界」…南方にあるとされる、仏教の浄土のひとつ。

4 「絹障子」…絹布を張った襖^(注5)。

問十七 問題文甲の傍線部A・B・Hの意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- A イ 思いあぐね確かな結論を得る見込みが立たない。
□ いずれも優れた点があるので選択したくない。
ハ 前もって心に決めることなどできはしない。
ニ 宿泊の回数を予測できないわけではない。
B イ やつとこの場所を探し当てていた。
□ この場所で信仰生活を送っていた。
ハ どうにかこの場所を維持していた。
ニ この場所を布教の拠点としていた。
H イ ここに絵の具さえあったならば、絵を描いたことだろうが。
□ いくら絵の具があったとしても、才能が無ければ描けまい。
ハ 絵の具がある所を教えてください、絵を描いて差し上げる。
ニ せめて絵の具を使って、彩色ができればいいのだけでも。

問十八 問題文甲の傍線部C「なおほしそ」に見出される品詞を次の中から三つ選び、解答欄にマークせよ。(完答正解のみ得点とする)

イ 名詞 □ 動詞 ハ 副詞 ニ 助動詞 ホ 助詞

問十九 問題文甲の傍線部D「今の小法師」の正体は、実は何であったか。そのままその端的な答えとすることができ、二文節からなる五字以上十字以内の語句を、問題文の当該傍線部より前の部分に見出し、記述解答欄に書き抜け。

問二十 問題文甲の傍線部E「かやうに」の内容に対応する、一続きの二文を見出し、その最初と最後の三字を記述解答欄に記せ。句読点も一字とすること。

問二十一 問題文甲の空欄 F に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 悪業深重 口 因果応報 ハ 善悪不定 ニ 無常迅速 ホ 用意周到

問二十二 問題文甲の傍線部 G 「広沢の与三入道」は、どのような人物と考えられるか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 僧形の姿をしてはいるが、鳥獣を殺生することもいとわれない非情な人物。
口 和知を領有する地頭であり、幕府で枢要な地位を得ている政治的な人物。
ハ 相当に裕福であって、美術や文学など芸術にも関心をいだく有力な人物。
ニ 熊野を信仰する僧侶の身でありながら、好色な性癖を宿す世俗的な人物。
ホ 鎌倉に本拠をもつおそらくは武士で、既に出家遁世を遂げた高潔な人物。

問二十三 問題文甲の内容と一致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 作者は大可島のもと遊女たちの生活に接し、その満たされた経済状況に羨望の念を隠せなかった。
口 厳島神社の祭礼は華麗であったが、仏教を信仰する作者にとっては、どこか物足らぬものがあつた。
ハ 作者が訪れた足摺岬の堂は、仏教信仰の拠点であり、信者たちから食事の接待を受けることができた。
ニ 和知の女と知り合った作者は、誘われるまますぐ訪ねたいと思ひ、帰途、経路を変えてわざわざ赴いた。
ホ 作者は絵画を描く才能に恵まれていたので、客人を迎える準備に筆を振り、高い評価を得ることができた。

問二十四 問題文甲の出典である『とはずがたり』に成立が最も近い作品を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 『栄花物語』 口 『懐風藻』 ハ 『去来抄』 ニ 『徒然草』 ホ 『風姿花伝』

乙〔問題文甲の二重傍線部「霓裳羽衣」に関して、『楊太真外伝』には「逸史」を引いた次の一節がある。なお、問題に関連する箇所を送り仮名、返り点は省いてある。〕

羅公遠天^ノ宝初^メ侍^ニ玄宗^ニ。八月十五日夜、宮中^ニ翫^テ月、曰、陛下能^ク從^{ヒテ}臣月中游^ニ乎。乃取一枝^ト **X**、向^{ヒテ}空擲^シ之、化^シ為^ニ橋^ト。其色如^シ銀^ノ。請^フ上同登^ル。約行^ハ数十里、遂^ニ至^ニ大城闕^ニ。公遠曰、此月宮也。有^ニ仙女数百、素練寬衣、舞^フ於^ニ広庭^ニ。上前^ニ問^フ曰、此何曲也。曰、霓裳羽衣也。上密^{カニ}記^シ其声調^ヲ、遂^ニ回^リ橋^ヲ、却顧^シ、随歩而滅^ス。且論^シ伶官^ノ、象^シ其声調^ヲ、作^ル霓裳羽衣曲^ヲ。

(注) 「羅公遠」…唐代の道士。 「天宝」…唐の玄宗の年号。 「玄宗」…唐の皇帝。 「伶官」…音楽師。

問二十五 問題文乙の傍線部 A 「八月十五日」について、旧暦のこの日は何と呼ばれるか。その呼称(漢字二字)を記述解答欄に記せ。

問二十六 問題文乙の空欄 X には、植物名を表す漢字一字が入る。この植物は、中国では月に生えていると伝承され、科挙に合格することを「折 X」ともいったことが知られる。このことは日本にも伝わって、菅原道真の母は道真の元服に際して「ひさかたの月の X」も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」と詠んでいる。その漢字として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 梓
口 桂
ハ 桜
ニ 椿
ホ 柳

問二十七 問題文乙の傍線部B「請上同登」を書き下し文にあらため、全文ひらがなで書くとどうなるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ かみをこひおなじくのほれる。
- ロ じやうよりこひおなじのにほる。
- ハ あがりておなじくのほらんをこふ。
- ニ うえにのほるをおなじにせんとこふ。
- ホ しやうにおなじくのほらんことをこふ。

問二十八 問題文乙の傍線部C「却顧、随歩而滅」はどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 振りかえると、歩くたびに仙女が姿を消した。
- ロ 考え直して、歩むごとにその曲調を失った。
- ハ 振りかえると、一歩進むごとに橋が消えていった。
- ニ 考え直して、一歩を進めるたび明かりが減った。
- ホ 振りかえると、歩数を重ねた分だけ月宮が遠のいた。

問二十九 問題文乙の末尾に記される「霓裳羽衣曲」の由来として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 羅公遠が月宮で曲調を習いおさめて帰るや、夜明けを待てず音楽師を急ぎ立てて採譜させた。
- ロ 月宮で聞いた曲調を覚えて帰った玄宗が、翌朝音楽師に命じてその曲調にならって作らせた。
- ハ 仙女が羅公遠に秘蔵の楽譜を写させ、翌朝その楽譜を手に入れた玄宗が音楽師に伝録させた。
- ニ 月宮で耳にした曲調を書きとめて帰った羅公遠が、翌朝音楽師にその曲調に模して作らせた。
- ホ 仙女から曲調の奥義を授けられて帰った玄宗が、夜明けを待てず音楽師に奥義を伝授した。

(以下 余白)

早稲田大学 政治経済学部
2018年度 入試問題の訂正内容

<政治経済学部 一般入試>

【国語】

●問題冊子6ページ：設問（二） 問九 問題文1行目

（誤）

～最も適切な箇所を空欄 イ～ ホ のから一つ選び、…

（正）

～最も適切な箇所を空欄 イ～ ホ の中から一つ選び、…

●問題冊子8ページ：設問（三） 問題文・甲 12～13行目

（誤）

～白き湯巻きを着たり。うちかませての楽どもなり。…

（正）

～白き湯巻きを着たり。うちまかせての楽どもなり。…

以上